

＜ 今日の説教のポイント ルカによる福音書 20 章 1～8 節 ＞
イエス・キリストをなぜ信じる？ なぜ信じない？ それを考える。

1 (1) まず、この時のイエス様と民衆の姿を思い浮かべる必要あり。

直前の個所に続き、ルカはイエス様が神殿の境内で「民衆に教え」ておられたと告げ（マルコには無い）、そしてさらに、「福音を告げ知らせて」おられたと付け加えています（マタイには無い）。「福音（エヴァンゲリオン）：良い知らせ」は、新約聖書では「神の国」とセットで語られていることが大事で(8:1)、それは「神様の支配（国）はすでにあなたがたの間にあるのだよ」（17:21）ということであり、イエス様はそのことを人々に教えられていたのです。ですから、ここの出だしで、恵み深い神様のことを笑顔で語るイエス様と、それを聞いて慰めと励ましを与えられて喜んでいる人々の姿を思い浮かべることが大事です。なぜなら、その姿を見て祭司長、律法学者、長老たちが快く思わなかったからです。それは何を意味しているのでしょうか？

2 的を得ていた彼らの問いかけ、「どんな権威から？ 誰が与えた？」

彼らの問いかけは嫌らしいですね。「境内で教えたり、商売人を追い出したり、どうしてお前にそんなことができるんだ。そんな資格はない」と言っているのです。しかし、「どんな権威で、誰がその権威を与えたのか」という問いかけは実は的を得たものでもありました。資格の一番深い出所、「神様から」を導き出す問いかけであったからです。

彼らのその後の思い巡らしは、聖書の神様に一番近い祭司長や律法学者がその神様のことは全く考えずに、この世の権威や人々からどう見られるかに終始している姿を示しています。イエス様はそれを見抜き、彼らの土俵に上がりません。イエス様がよく示されたこのやり方は私たちにとっても有益です。相手の土俵で勝負するのか、こちらのリンクで勝負するのか、それともそれ以前の状態なのかを見分けて対処することがこの世では大事だからです（具体的に説明します）。

3 祭司長たちの後を追うのではなく、神の国の福音に生きる！

「世間」しか測りを持たない生き方をする時、焦燥が募り、真の平安は得られません（阿部謹也：「世間論序説」）。どのような人生に見えようとも、イエス様の生と死そして復活を通して示して下さった内容、すなわちイエス様の教え、「神の国（支配）の福音」を信じて生きる時に、私たちは主の平安の中を歩む人生を生きることができるのです。